



今年企画 流山の馬に関する史跡紹介

午年ももうすぐ終わりですね。
流山市にある馬にまつわる史跡を紹介する企画の最終回です。
今回は野馬除土手をご紹介します。

野馬除土手

松ヶ丘1丁目471-35地先
JR常磐線南柏駅徒歩6分
他市内各地



市内の山林や柏市と接する境界を歩くと、林の中を一直線に走る土手を見かけることがあります。土手をよく見ますと、高さが場所によって異なります。しかも土手が二重になっていたり、土手下に溝があったりします。地元の人たちは、これらを「ぬまどて」や「ぬまぼり」と呼びます。「ぬま」は野馬のことで放し飼いにした馬のことを指します。

江戸時代、現在の柏市豊四季や十余二を中心とした周辺には、「牧(まき)・牧場」がありました。牧は、一般に言われるところの牧場とは大分様子が違います。現代の牧場は、作で囲んだ土地に馬を放って飼います。しかし、昔のこの地方の「牧」は、幕府が原野に馬を放し飼いにしたため、農民たちは野馬から家や畑を守り、野馬が自分たちの田んぼなどでけがをしないようにする必要がありました。そこで、柵でなく土手を築いて、生活する環境を分けたのです。

このような意味あいから、江戸時代の古文書には、「野馬土手や野馬堀ではなく、「野馬除土手」(「野馬除堀」とかかかれているものが多いです。台地上のものでは、家や畑側に高さ九尺(約2.7メートル)厚さ一尺五寸(二尺五寸の土手を築き、牧側に深さ三尺(四尺(約0.9メートル)口幅四尺(四尺五寸(約1.2メートル)敷三尺の堀をさらった)とあります。現状を見ますと、溝の手前にも小高い土手があるのがわかります。

今まで何気なく見ていた土手は、馬と共存する為の大切なものでした。流山市立博物館に、野馬土手の展示パネルなどもあります。お散歩のときに土手に目を向けてはいかがでしょう。耳を澄ませたら、秋風の中に蹄の音を感じられるかもしれません。

参考資料：『流山のむかし』流山市博物館市史編さん係編 流山市教育委員会

馬をキーワードに流山の歴史を見る～読書週間講演会～

11/15 (土)
14:00～16:00

午年の読書週間に、『小金牧野土手は泣いている』の著者青木更吉氏に、流山の馬にかかわる様々な歴史の存在についてお話していただきます。

受付方法

10/22 (水) 10:00～
電話 or カウンターにて受付
定員：70名
参加費：100円(資料代)

